秋の夜の空を仰いで

法學博士　河田嗣郎

秋の夜の空を仰げば，誰でも何かの感に打たれる．其の美に驚くものもあるであらう．永遠無窮を感じる者もあるであらう．神秘を憶ひ，神に接する者もあるであらう．上根の人と下根の人とで，感慨は色々であるにしても，何人も全く無關心に秋の空を見ることはあり得ない．そんなにも秋の夜の空は意味深遠である．

私の鄉里地方の盆踊りの歌に，“天の星ほど餅食やよいの，富士の山ほど砂糖をつけて”といふのがある．昔，百姓が貧乏で，食べるものも十分でなく，餅など腹一杯食べたこともなかつた時代の，百姓の感情を語つたものとして，面白いし，哀れでもある．

同じく盆踊りの歌に，“天の星樣數へて見たら，三十三萬百七ツ”とあるが，“京の三十三間堂の佛の數は，三萬三千三百三十三”といふのと同巧異曲で，ともかく大變な數である．その無數無量の星辰が，一々に世界を爲し，生命を有ち，詩を語り，信仰を啓示するかと思ふと，實に感慨無量である．七夕さまだとか，商人星だとかいふやうに，人格化されたものもあれば，大熊，小熊，蛇など，鳥獸の名を持つのもある．これは，西洋でも，東洋でも同樣である．南極の壽星なども好い．

東洋人は，「天の川」といひ，「銀河」と感ずるのに，西洋人は「乳の道」と見る．そこいらは東洋人と西洋人と大分違ふやうである．たゞ見たまゝの感じを其まゝに名づけたのだが，感じ方が違ふ．又，同じく“河”と見るにしても，日本人は單純に“天の川”といひ，支那は“銀河”と形容して見る．此所にも多少の相違がある．銀といふのだから，お金ほしさの餘り，名づけたのではないと謂へるが，やゝ物質的である．ましてや「乳の道」と見るに至つては，牧蓄民族の原始感で，面白いけれども，飽まで唯物的である．とかく支那人は，色々の意味に於て，日本人と西洋人との中間に居るやうだ．

月に關しては，あまり迷信的なことを聞かないが，星に關しては色々の迷信があるやうだ．太陽は敬ふべく，怖るべきものであり，月は愛すべく，親むべきものである．星は何すべきものであるか？　恐るべきものでは全くない，愛らしいとは言へるであらうが，月ほどではない．拜むに適するから，やはり敬すべきものであらう．宵の明星．曉の明星などは殊にさうである．併し，獨逸語では，月は男性であり，太陽は却つて女性だから，冬に太陽が照つて，暖かさを送つてくれるのは，母の愛に等しいであらう．女性と感ずるのも無理はな

い．我國の様な亞熱帶や，熱帶地方の國々の，夏の烈々たる太陽の恐るべきと，同様に考へてはならぬ．月は，我が國などでこそ，女性と見らるべきだが，冬の寒空に，獨逸などで，月を仰いだら，全く凄い感じである．特に弦月が凄い．三日月は鎌のやうだといへやう．男性にされても仕方がない．

秋の夜の空を仰いでゐると，私は天文學者や數學者は偉いと思ふ．あれを一々觀測して，質量を計つたり，距離を計算したり，光線を分析したり，寫眞に取つたり，全く人間わざではないやうな事をやる．第一，暦を作るのからが大變な事であるが，彗星の軌道を知つて，其の出現を豫言したりするに至つては，未開人が魔法使ひだと思ふのも，當然である．望遠鏡で見得ない前に，寫眞にも撮り得ない前に，計算と推理とで，海王星の存在を確定した人達は偉い．

けれども，又，天文學者と稱せられる人の中にも，ひどいのがある．もうよほど前の事だが，ちやうど火星が地球は近づいて來て，火星の事が種々新聞や雜誌に書かれた際，或る天文學者は，“今，火星は秋の最中である．例の運河の緣には木々が紅葉して眞紅である．望遠鏡に紅く映つて見えてゐる”と書いたものだ．私は讀みもて行く內に，此處に至つて，其の雜誌だつたか，書物だつたかを拋りつけてしまつた．人を馬鹿にするにも程がある．講談師ならいざ知らず，苟も學者と名のつく者が!!とひどく憤慨したものだ．さすがに，昨年は，そんなのは出て來なかつた．

私の住んでゐる所は田舍びた所で，人家もまだ少くて，廣々としてゐるから，月を見るにも，星を仰ぐにも，まことに適した所である．生れ故鄉は附近で一番高い山里で，何れへ向つても水源地だから，夏から秋へかけての夜の空は特に美しく見られる．子供の時分から庭へ置座をして，寢そべつて夜を眺めることが好きであつた．今でも，夏の宵には，よく之をやつてゐる．秋の夜の散步も好きである．月や星は幼い時分からのお友達のやうな氣がする．格別天文學者にならうとは思はなかつたが，たゞ平凡に之を眺めて，空想に耽るのが好きなのである．

會員各位より“天界”の原稿を歡迎す

投稿規定は

1. ひだり横書きとすること．
2. 本誌1ページは，35字づめ，35行であるから，適當なる原稿用紙を用ゐ，なるべく編輯に便利なるやうに，書くこと．
3. 別刷を入用とする人は，あらかじめ其の部數を，編輯係に申し込むこと．但し，之れは，實費を本會會計へ申し受けます．
4. 原稿〆切は毎月末．
5. 本誌の編輯事務所は，京都市上京區平野宮北町52　山本一清方．